

編集室から

金沢・能登を中心に『八幡のすしべん』というチェーン店をよく見かけます。消費税導入までは掛けうどん100円の値段を頑として守り続けていました。美味い・安い・早い(この順序が大切)の三拍子がここまで確実に揃っているお店もそうありません。

地産地消との掛け声で「地元産の食材を地元で買おう」と喧伝されている昨今ですが、このような言葉が登場する遥か以前から、地元の食材を積極的に使って、地元の農業・経済にも貢献する経営をされてきておられます。そんな姿勢に共感して、平日、能登での仕事の際の昼食はよくお世話になっています。

このチェーンを運営されている久保さん(奥様の房子さん)とは数年来お付き合いをさせていただいています。関西から嫁いで来られたと風の便りに伺っていますが、関西人的な商売気は微塵も感じない至って腰の低い素晴らしい方です。その久保さんに何度かこのニュースのご寄稿をお願いしているのですが、深くご遠慮されて、未だ実現していません。

そんな久保さんから先日、お手紙を戴き、楽しい社内報をご紹介いただきました。その上、このニュースレターは毎月必ず読みたいとのこと。本当に光栄に思いました。

各地で商店街が衰退著しいのは、全国チェーン進出の影響も少なくありませんが、飲食業界も、その例から外れることは無く、能登にも全国統一ブランド店の看板が目につくようになっています。

本物が本物であり続けることが益々難しくなっていく世情ではありますが、その価値を一人でも多くの方に判って戴き、草の根で支持の輪が広がってこそ、企業・事業の繁栄が「後から着いて来る」のでしょう。東京出張が多くなって、すしべんに寄れないのが残念です。(は)

このニュースは、計画に携わる若手の技術者を育てることを目的に発行を始めました。その後、計画という仕事の内容や、普段、計画マンがどのようなことを考えているのかなどに触れて、少しでも業界を知っていただければと考えて編集しています。



2009/06

(株)アスリック

<http://www.neting.or.jp/usric>

〒920-1167

石川県金沢市もりの里1-149-302

電話 076-233-7217

Fax 076-233-7375

Email usric@neting.or.jp

2009/06

(株)アスリック

<http://www.neting.or.jp/usric>

水無月



山形かみのやま温泉
齊藤茂吉ゆかりの山城屋にて
by hama

たとえば運転中にタバコの灰が落っこったり、たとえば突然携帯電話が鳴りだして、出ようかどうしようか一瞬間んだりすると、そのほんの瞬間、自分の動きがぱたりと止まっているのに気がつく。あぶないのである。

なぜあぶない？ 道交法違反はともかく、本当にあぶない理由は、予期したのところが動きに、びっくりしてしまったからだ。人も何十年も生きていると、経験は豊富だ。たいていの事件は経験則の中で発生する。だから、ほとんどすべてのできごとが、予測の範疇だったりする。

イチローのバットだって、ボールが当たってから反応して振り回してちゃ、さしものイチローだって間に合わないから、予測のアクションをやっている。イチローは「からだが反応する」とよくいうけど、これは脳みそじゃなく、からだが予測して勝手に動いてるって意味で思う。

イチローさんみたいな運動神経はないけれど、ちよっと大人になった人間は、みんな予測

アクションで動く。意識してもしなくても、次になにが起きるか、考えている。その結果、大人は「こんなことするとひどい目に遭う」と思うことは、やらなくなる。ひどい目にあった経験則から、予測しちゃうんですね。それで、大人の安全を維持している。

たまには羽目を外してみたらいいんじゃないの？なんて思う。運転中に携帯電話を使えとか、タバコの灰を掃除しろとか、パンツ脱ぎたくないまで酔っぱらえとか、そういうことじゃない。安全ばかり声高に叫んでいると、この先変化のない一生を送ってしまうかもしれない。へたすると、安全ボケして肝心なときに危機対処ができないかもしれない。

だからぼくはときどき、わざとまちがって道を曲がって道に迷ってみたり、目をつぶって歩いてどぶに落ちてみたりする。これ、小市民的危機対策。自衛隊には頼らず、そして、少しでも、楽しんで。

【プロフィール】

（こつまぎ ひろし）



二輪スポーツ、トライアルの情報誌を発行する。砂漠やジャングルでの取材経験もあって、それで人間性を少し改造されて現在に至る。

<http://www.shizenyama.com/>

濱のいびき 『岳父の仕事』

最近、週末に田畑の草刈や、山の手入れに入ることが増えた。義父が病を得て、野良仕事ができなくなり、いよいよ代替わりが訪れたようだ。

義父が丹精込めて育ててきた梅ノ木林や、ゆずの木林。隣の山から竹が進出してきてかなり荒れてしまっている杉林。これらの手入れを週末の僅かな時間だけでこなそうというのだから、素人ということもあってかなりの重労働になる。猛烈な竹の進出を見て、エンジンチェーンソーも買った。

事実、杉山に向かうにも、途中の道が既にツルやら背の高い草やらで藪と化していて、これに立ち向かった時は、本当に難渋した。平日の慣れない大都会出張のためか、身体は余計に疲れやすくなっているようだ。気付くと力任せに草刈機やら、鉋・手鋸・鎌を振り回していた。すっかり息が上がってしまい、全く続かない。

これでは、疲れるばかりで、仕事は捗らぬ。山に向き合つ姿勢に、自らの疲れの原因があったと思いなおし、どうしたものかと、手を止めて見上げた時、目の前の木の枝が目にとまった。

山を見渡す。その木を見渡す。山は、木はどうして欲しいのだろうか。この木も蔓が絡まってさざかし困っているだろうと思って眺めなおすと、やはり先に目に止まった枝を切るが良いようだ。となんとなく感じた。こういうとき、あれこれ素人考えで理屈を探すより、感

じたまま行動してみる方が善い。

件の枝を手鋸で切り始めた。するとどうだろう。行く手を阻むかのように茂っていた草むらの塊が枝ごとずると剥がれた。これにはたまげた。つまり、目にした枝に絡んだ蔓が草むらごと、一緒に持って行ってくれたのだった。しかも、楽に。

これが転機になって以後、梅ノ木の下草刈も、草刈機を振り回すのではなく、地面に沿って力を抜いて丁寧に動かしてゆくと、むしろ逆に綺麗に刈れてゆくことも判った。

浅はかな考えや力任せでは到底及ばない、無用な力を使わずに楽で確実な山仕事の極意を垣間見た気がしている。

入梅前までに大体の手入れを済ませたい処ではあるが、この六月には船舶免許を受講・受験することにしたので二週空く。漁師である義父の跡を継ぐことにして、組合にも加盟した。田畑はほぼ毎年、山も時折手伝ってきたが、漁師としての歩みは、ほぼ皆無である。近所の若い衆や、叔父程の年齢の先輩漁師連に、教えを請って、一から始める以外に無い。

家内の父・義父の事を岳父ともいう。この語の「岳」とは、「高く尊敬するもの」という意味である。決して大きくは無い体躯で、多くを語らない岳父である。雲に霞む遠い里山の頂を眺めながら、岳父の成してきた仕事を、想うのである。

地方都市近郊で「奥座敷」と呼ばれた温泉地の衰退が言われて久しい。東北地方においても、福島県の飯坂温泉、東山温泉、山形県の上山温泉、秋田県の男鹿温泉などが該当し、青森県では今回とりあげる青森市の浅虫温泉もその典型例であろう。

浅虫温泉は1190年頃、慈覚大師により発見されたといわれる歴史のある温泉である。青森市出身の私は、子どもの頃から慣れ親しんだ場所であり、浅虫は温泉だけでなく海水浴客、また旧水族館や廃業した遊園地への来訪者などでにぎわった。

近年も1、2年に1度ほどは宿泊し、経年の変化を見てきた。年々、旅館が減り衰退を実感していたが、今年冬におそらく温泉内で経営体としてはナンバー3であると思われる旅館が突如、廃業した。温泉内では、女性客を意識し少しセンスのよい旅館として評判もよいところであった。私も以前、青森地域の観光調査で訪れ社長にヒアリングをした経験があるが、非常に好印象を持っていた。浅虫ではこの2年間で5軒が廃業し（地元紙による）、ついに旅館・ホテル数は20軒を割ってしまった。

衰退の要因はこれまでも指摘されていることであるが、旅行のスタイルが団体客主体から個人、グループ客主体に変化してきたこと、交通手段が鉄道からバス、乗用車になったこと、施設の老朽化の進行や廃業旅館の放置などによる景観の悪化、まちなみに温泉街の風情がないこと等があげられよう（旅館の廃墟を見ると、旅の気分がぶっとぶのは私だけであろうか？ 東山温泉、花巻市の台温泉では廃墟旅館の多さにげんなりした）。

浅虫温泉の活性化は、市にとっても重要課題であり、これまでも「道の駅浅虫」の整備、浅虫温泉駅前に足湯の整備などでこ入れを行ってきた。

一般のゴールデンウィークに浅虫温泉に宿泊したが、県立の浅虫水族館は満員で大渋滞、道の駅は盛況（青森県内で一番売上げがあるようだ）であった。この期間は弘前のさくら祭りにより、どこの旅館・ホテルもいっぱいであったが、温泉街は静かなものである。近場からの来訪者は、車できて水族館と道の駅を巡って帰るのであろう。「道の駅」は展望浴場があり、ここで一風呂浴びてとなるのであろう。客層がバツィングしないのであろうが、道の駅が栄え温泉街には客が来ないという状況である。

青森市では2010年東北新幹線青森開業を控え、浅虫温泉にとってはさらに厳しい状況になるかも知れない。

浅虫温泉への宿泊客の交通手段は、古い話で恐縮であるがいまから15年ほど前でもJR利用は5%ほどであったという。もうJR利用が少ないのでさほど影響がないとも考えられるが、東北新幹線ルートは東北本線から外れたルートで新青森駅に入る。現在の八戸～青森の東北本線は並行在来線としてJRから切り離され青い森鉄道の路線となるため、現在、浅虫温泉に停車する特急列車は廃止される。実際の利用客が少ないとしても、アピール度、注目度は落ちるのではないだろうか。

現在の浅虫温泉の旅館・ホテルには、大型のホテルで陸奥灣を望める展望風呂を売りにしているホテル、津軽三味線の生演奏が聴けるホテル、版画家棟方志功ゆかりの旅館、客室数は一桁で行き届いた家族的なサービスと懐石料理を売りにしている旅館など、特徴をもったところがある。なんとか、浅虫温泉の持続を願いたい。

相続について⑮

無効になった遺言状

今回のケースは、せっかく父親が遺言状を残してくれたのに、法的に無効だったケースという事例です。

Case Study

上野さん（仮名）は3人兄弟の長男で、父親の存命中に相続財産のことで相談を受けていました。

その内容は、自分が最初に死んでしまった場合、妻に財産の全部を相続させたい。そして妻が亡くなったあとは、3人の息子たちに各々相続する財産を指定しておく、争うことをしてほしくない、というものでした。

上野さんは、遺言状作成をアドバイスし、父親はその旨を自筆遺言書という形で残したのち、亡くなりました。

ところが、家庭裁判所で検認手続きを行ったところ、この遺言書は無効とされてしまったのです。

Answer

このケースは、共同遺言と見なされたため、無効になったと考えられます。2人や3人で1通の自筆遺言書を作成する、たとえば、ご夫婦が、2人一緒に子どもたちあてに遺言を書くというケースがありますが、署名が2人並んでいる遺言書の効力は全くありません。これを共同遺言といいます。「私たち夫婦が築いた財産はA地区の土地は長女に、B地区の土地は長男に」などという遺言書は意味がなくなってしまいます。

これは夫婦だけでなく、兄弟姉妹、友人同士でも当てはまりますので、共同の遺言書は作らないことです。

それでは、このケースでは何が問題だったのでしょうか？ 1人の手によって作成された遺言書でも、共同遺言と見なされてしまったということになります。

これは、長男、次男、三男に各々の相続財産を指定したことまではよかったのですが、「この相続は両親の死後に行われるべきで、父親が死亡した場合は母親に全財産を相続させること」という意味合いの文言が問題なのです。これは、母親が先に亡くなった場合は、父親が上野さんはじめ3人の子に相続させるだけということになるため、問題はありません。

しかし、その逆に父親が先に亡くなってしまった場合は

「父親から母親への相続」と「その母親から3人の子へ」という2人分の遺産相続が含まれていることになり、全体が無効になってしまいます。一度夫が妻に相続させてしまった財産は、その次の相続の指定をすることはできません。このような場合は夫婦別々に遺言書を作成しておけばよいでしょう。

『富士の国から ～大魔神のたび～ 伊豆の旅3』

静岡県観光局 溝口 久

この晩は熱川に泊まることにしていた。ここには海岸の波打ち際に露天風呂「高磯の湯」がある。これに入らねばと先を急いだ。700円の入浴料は高めではあるが、このロケーションに納得する。

今晚の宿は「一柳閣」、味気なかったであろう鉄筋コンクリートの壁面を木の格子で覆い隠し、大広間は竹とすだれを使い半個室のようなたたずまいに改造している。夜は行灯やテーブル上のローソク調の照明で、天井からの照明を落としている。朝は逆に天井からの照度を確保している。かつての団体仕様の施設から今やカップルが主体の宿屋に変わっている。ハードだけでなく、ソフトにも配慮が見られる。「思ひ出帳」がそれだ。滞在中に書いた内容に主が個々に返事を書く。これが人気だと言うのだ。以前はチェックアウトまでには返事を書いていたが、これだと帰りに読んでしまいそれまでになる。むしろお客が帰ってから返事を書き、次に来た時の楽しみにしてもらおう。ただこれだけのことがリピーターをつくっていくことになる。

記念日にはケーキや花の用意をするが、これじゃ物足りないもっと何かを、プロポーズしたいからだとお客は言う。スタッフ集めて何かいい案ないか？「社長、花火はどうですか？彼女のためだけの花火。スターマインも出してね」「お！それいいね」早速お客にて案する。「20万円かかりますが、、」「うーん でもいいでしょう」。

花火を上げるためには、消防署、漁協、警察、役所の許可が必要になるし、他のお客に知られては具合が悪い。金額以上に手間隙がかかった。

彼女を外に連れ出し、冬の夜空に突然の花火 感動に咽ぶ とシナリオとおりだった。

すごいサービス精神に主の石島さんにただただ天晴れ。それで結婚

はというと、「・・・」。

一柳閣のHPに「恋旅ぶらん」がある、気の効いたサービスが並びが、花火のオプションメニューは残念ながら無い。その後カップルのためだけに花火を上げたことはないとのことだが、リクエストあれば応じるとのこと。

夕食後には、最近やり始めた手打ち蕎麦を指導する役が待っていた。昨年末に来た時よりも若干向上していたが、あまりやっていないようだ。周りに数人やる人がいるといいのだが。是非、体験蕎麦打ちも宿のお楽しみプランに入れて欲しいものだ。

由布院温泉の亀の井別荘の中谷健太郎さん曰く「旅館業は面白い、お客さんは何やっても喜んでくれるからね」「お客様を親戚と心得、生涯の縁を結ぶべし」。

ここ一柳閣には、そのことを感じさせるものがある。

今回の旅のテーマは「温泉と人」だ。いい温泉に数多く入ること、そして伊豆の素晴らしい方々とお会いして交流することだ。6箇所10回以上の入浴を楽しみ、8人のオーナー達に会い話を聞いた。



「伊豆はなかなか一つにまとまらない」ということをよく聞く、特に行政から。まとまるってどんなイメージなんだろう。個々の温泉郷のまともりは当然ながらある、それが伊豆としてまとまる？ プロモーションをみんなでやることかな？ テーマを一つにして伊豆を売ると言うこと？ 「まとまる」がわからない。でも連携ならわからないこともない。どんな連携があるのか、今回お会いした旅館オーナーを集めて、ワークショップを絡めた意見交換会をやってみたい。そんなところから連携して成立つ伊豆観光圏を探ってみたいのだ。

